



Title	<都市化>とノスタルジー：都市における奄美出身者の心性
Author(s)	小林, 多寿子
Citation	年報人間科学. 1987, 8, p. 23-40
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/12862">https://doi.org/10.18910/12862</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八七年二月〕  
『年報人間科学』第八号二三二頁—四〇頁

## 「都市化」とノスタルジー

——都市における奄美出身者の心性——

小林多寿子

# 「都市化」とノスタルジー

## ——都市における奄美出身者の心性——

- 一、はじめに
- 二、ライフ・ヒストリー分析と「都市化」
- 三、「都市化」のプロセス
- 四、「いなか観」と「都会」観
- 五、ノスタルジーと「集合的記憶」

### 一、はじめに

一九八五年一〇月一三日、尼崎市立産業郷土会館において、関西阿鉄会<sup>(1)</sup>の創立三〇周年の総会が催されていた。関西阿鉄会は、阪神都市圏において奄美諸島出身者がつくる多種多様な同郷団体の一つであり、この総会はすでに論じた同地域出身者の会の運動会と同様に、都市における「ふるさと」の一日としてとらえられる<sup>(2)</sup>。ところに記念のこの日は、受付けで『三〇周年記念誌』が参加者全員に手渡され、二〇〇名以上の会員や多くの来賓、母村・阿鉄の区長らの出席もあり、たいへんにぎやかな総会となつた。

一九五五年四月に武庫川河川敷で第一回めの総会を催して以来のこの三〇年間に、関西阿鉄会は二〇数人から三三二人へと規模が大

きくなり、他方母村・阿鉄の人口は約六〇〇人から八八人へと激減した<sup>(3)</sup>。そしてその期間には、阪神都市圏へ移り住んだ阿鉄出身の人たちが都市に適応し定着していくたプロセスがあり、それは、地方からの人口流入によって形成されてきた日本の大都市における、人びとの都市への適応過程の一事例として位置づけられるだろう。

本稿では、このプロセスを、個人が社会に一般的な行動様式や規範を内在化して社会の成員となっていく「社会化」になぞらえて、都市的生活様式や価値観をとりいれて内在化していく個人の「都市化」のプロセスとしてみていく。「都市化」の概念は、従来の都市社会学では、人口集中や産業化によって地域社会が変化していくといふおもに形態的概念として用いられてきたが、ここでは個人の意識や価値観のレベルでの変容をおいた概念としてとらえる。そしてこの「都市化」の概念によつて、地域性の大きく異なつた地方から大都市へ移り住んだ人びとが、一生をかけて都市的に変容していくプロセスを考察し、都市に生きる彼らの心性<sup>(4)</sup>を探つていくことをめざす。

## 二、ライフ・ヒストリー分析と「都市化」

「都市化」の諸相を明らかにするにあたって、関西阿鉄会の人びとのなかからインタビューして得られた七〇才代、五〇才代、三〇才代という世代別のライフ・ヒストリーの分析によつてみていくことを試みたい<sup>(5)</sup>。

ここで分析の対象とするライフ・ヒストリーとは、D・ベルトーがいうように、現在の時点における過去の経験の再構成であり、個人の主観的経験の語られる「ライフ・ストーリー」としてとらえられるが、その物語に描かれている「話者の人生の軌跡(trajectoire de vie)」には個人のヒストリーがあらわれている<sup>(6)</sup>。そこでライフ・ヒストリーが、個人の語るストーリーとしての側面と同時に、社会的歴史的コンテキストのなかで存在し、社会構造上に位置づけられる個人のヒストリーとしての側面<sup>(7)</sup>をもあわせもつという二面性に着目しよう。

母村・阿鉄から阪神都市圏へ移り住んだ彼らのライフ・ヒストリーには、「過去」から「現在」への時間的移動だけでなく、「いなか」から「都會」へという空間的移動が内包されている。したがつて、「過去」—「現在」と「いなか」—「都會」という二つの軸でマトリックスをつくると、図1のようにならべ、「過去」の「都會」、III「現在」の「いなか」、IV「現在」の「都會」という四つの象限ができる。

このライフ・ヒストリーにあらわれた四つの象限をもとに、個人が

「都市化」されていく諸相のなかでも、ヒストリーの側面から「都市化」のプロセスをとりあげ、ストーリーの側面から「都市化」された個人の意識を明らかにできるだろう。

ライフ・ヒストリー・インタビューにおいて語られたディスクールは、I、II、III、IVそれぞれの象限に属するものとしてふりわけられるが、基本的には彼らの「人生の軌跡」に共通の特徴であるI→II→IVという変遷をふまえたうえでよりよく理解さねばならない。たとえば、「いなか」・阿鉄を出たときの状況やきっかけ、初めて「都會」・大阪に来たときの印象、とまどいやはじめなじめなかたこと、最初についた職業やそれ以後の転職、住居の移動などをめぐつての話がなされている。あるいは、「過去」の「都會」での阿鉄会への参加状況、「現在」の「都會」での会の行事への参加頻度やかかわり方、そして「過去」から「現在」にいたる「都會」での暮らしぶりについて語られている。これらのディスクールは、語っている人自身がIV「現在の都會」に位置していることを前提として、I「過去のいなか」からII「過去の都會」へそしてIV「現在の都會」へという変遷にもとづいた言及であり、「都會」へ移り住み、二〇年三〇年かけてしないに都市的生活様式や価値観を身につけていった「都市化」のプロセスを表現しているととらえられるだろう。

さらに、IV「現在の都會」にいる人からみたI「過去のいなか」とIII「現在のいなか」、IV「現在の都會」についてのディスクールをとりあげると、幼い頃の思い出、山河や海などの心象風景からなるふるさとのイメージ、「現在」の「いなか」との往来や今後の帰郷の

意志などを含むふるさと観あるいは「いなか」観と、「現在」の「都會」生活についての感想や評価のような「都會」観をみることができる。ここには「都市化」された個人の意識がどのようなものであるかが示されているだろう。

以上のようなパースペクティヴにもとづいて、世代別のライフ・ヒストリーを具体的に検討してみようと思う。

の対象とし、I→II→IVという象限の移行のなかに「都市化」のプロセスの特徴をみいだしたい。それに先だって「一人の個人史を概観しておく。

#### (1) Fさん

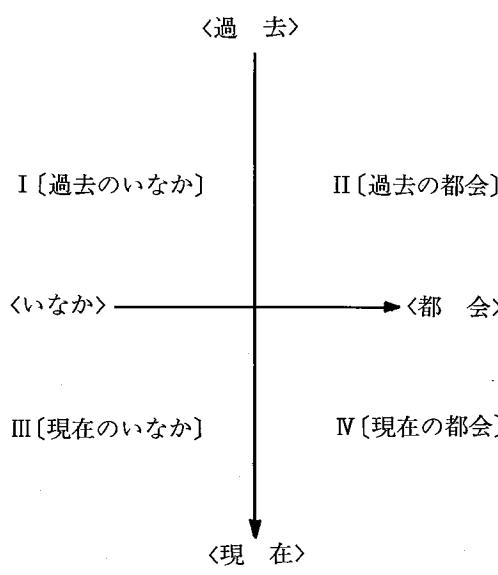


図1 ライフ・ヒストリーにあらわされた4つの象限

Fさんは、一九一〇年（明治四三年）に阿鉄で生まれ、阿鉄尋常小学校を経て、一九二五年古仁屋高等小学校を卒業し、一九二七年（昭和二年）に大阪へ来た。まず、うどん屋で三ヶ月でつち奉公をし、ついで大阪港の曳きボートの炊事係を約一年し、そして大阪市交通局の「少年車掌」となる。一九三〇年徵兵検査を受け、甲種合格し、翌三一年から三三年まで鹿児島で兵役につき、除隊後、交通局に復職した。一九四一年ふたたび応召し、北満のハイラルで約四年間過ごしたのち、東京、銚子、甲府を経て、大牟田で終戦をむかえた。一九四八年、鹿児島県川内市に疎開していた妻を伴い、二二年ぶりに阿鉄に帰る。しかし終戦後、帰村者が激増して食糧難となつたため阿鉄を離れ、古仁屋で「ヤミ商売」をしていたが、奄美諸島が復帰するうわざが流れるなか、一九五二年四月ふたたび大阪へ来る。大阪にもどつても交通局には復職できず、貿易会社の守衛となり、定年までつとめた。Fさんは、一九五五年に関西阿鉄会を再結成し、初代会長となつた人であり、戦前、大阪市港区で「一心会」という名称でできていた阿鉄会の前身についても記憶している貴重な人である。

本節では、一九一〇年生まれで七〇才代のFさんと一九三一年生まれで五〇才代のYさん、二人の男性のライフ・ヒストリーを分析

### 三、「都市化」のプロセス

(2) Yさん

Yさんは、一九三一年（昭和六年）に阿鉄で生まれ育ち、阿鉄で「青年団活動」をしたり、「商売のまね事」をしたりしたのち、一九五八年秋に初めて大阪へ出て、両親が阿鉄出身の女性と結婚する。いつたん阿鉄に帰るが、翌五九年大阪へ移り住む。大阪では、まず兄宅に居候しながら、乳飲料配達の仕事を始め、三年後に店舗もつて独立し、一三年間乳飲料の仕事に携わる。現在では大島紬や温水器の販売を中心とした商業を手がけている。Yさんは、大阪にて以来ずっと関西阿鉄会にかかわりつづけており、一九六八年から七一年にかけて幹事長を、一九七九年から八二年にかけて十一代めの会長をつとめた。会長在任中には、老朽化した阿鉄の集会所を公民館分館として改築することに協力するという母村への財政的援助に力を尽くした。

個人のヒストリーは、C・W・ミルズやD・ベルトーラの指摘<sup>(8)</sup>のように、社会変動との連関で把握する視点が不可欠であり、Fさん、Yさんそれぞれのヒストリーも社会史的出来事との相互作用で形成されている。とくにFさんにとって三一才から四二才にかけての一、二年間は、第二次大戦、終戦そして奄美諸島のアメリカ軍による占領統治、一九五三年一二月に復帰という大きな社会史的出来事に直面し、それらがそのままFさんの日常生活を変えた時期であった。このような個人のヒストリーの特徴をふまえたうえで、「都市化」のプロセスをみよう。

(3) Fさんの「都市化」のプロセス

Fさんは、一九二七年、鹿児島を経由して船で約一週間かかって初めて大阪へ来た。

「ほくらのいなかでは、これという仕事がありませんでしたもんですから、：むかしの高等小学校、あれをでてね、そこで出てきたんです。」

最初はうどん屋の「住込みの小間使い」となる。大阪に来てまず苦労したのは言葉であった。

「往生しましたよ、言葉がわからなくて。半年くらいしたら、すぐわかつたですけどね。とにかく大阪の言葉が発音が早いでしょ。」

「で、ち奉公して最初の頃は、何の仕事がいいかってことを先輩に聞いた。何の仕事がいいかわからないからね。なんでもしましようわい。見込みのある仕事やつたらいいやろ、おやじにいわれてきたんじやがつていうたら、ほんだつたらうどん屋がいいんじやないかいうことで、うどん屋にはいつたんです。そしたら、うどん屋にはいつたら、全然もう。夜に出前もつていけば、あくる日はどこ行つたやらわからんようになつて（笑）。ほな、うだつのあがらないうどん屋におつてもしょがない。そしてすぐやめて港湾の船にのつた。」

三ヵ月ほどでうどん屋をやめて、大阪港の砂利運搬船にのることになる。一年ほど船で働いたあと、偶然目にとまつた募集の貼紙広告をきつかけに、大阪市交通局の「少年車掌」になつた。  
「で、つち奉公では金が少ないからね。お使いが五〇銭しかくれなかつたから。一日と一五日休みでね。そのとき五〇銭しかくれなかつたから。」

た。：：そして自分なんかの先輩の方が船乗つとつて、こうこうしてボート、ご飯炊く人ほしがつとるから、乗らんかいうから、ほななんばくれるねんいうたら、一五円くれるいうから、こりや多いわ、いうて乗つて。そうしてゐるあいだにね、市場行くわけです。責任者がおつて、今日は何々買うてこい。何々買うてこいいうの。それ紙に書いたのもつて、市場行つてこい。そこに交通局の教習所のあるところに市場があつてね、七条通りいうとこ。そしたらそこ通るときにはこう見たら、募集つていうのが少年車掌募集いうのが書いとつたからね。それに少年車掌がカーキー色の服着てね、歩けばそれにあれかっこいいな思うて、そして笑い話ですけどね、で、入つたんです。

さらにFさんは「都會」に来て仕事をみつけていく状況を次のように表現している。

「自分はね、もう亡くなつたけど、Aというて自分のおやじの遠縁にあたる人を頼つて：：出て来て、そして仕事ない、ほとんどもう住みですね、：：それからつぎつぎこういうふうに自分で、まずそういうでつち奉公で来てあつちこつち、ほんさんやね。あの頃は、ほんさんいよつた。そこで自分の好きなものに向転換していくわけです。足かけに入つて。」

昭和初期の大坂で一〇代だったFさんは、大阪の言葉を覚えつつ、まず住込みを「足かけ」にして、より賃金の高いあるいはより自分の好みにあう職種に移つていつた。移つていくときに、同じ阿鉄出身者の「つて」や紹介によることもあつた。奄美の言葉とまつたく

異なつた大阪の言葉を習得していくことは、同時に大阪という都市の生活様式や文化も学んでいくことであり、そうして「過去の都會」においてしだいに都市生活に適応していった。この期間は「都市化」の第一段階であるといえる。

第二次大戦から戦後にかけての国家レベルの大きな変動をまともに受けた一二年間が終わつて、一九五七年にふたたび大阪へ来てから、さらに「都市化」のプロセスが進展していく。言葉や生活様式のうえすでに「都市化」はかなり進んでいたが、再度来た「都會」では家族が生きていくための仕事を探す時期があつた。

「昭和二八年か九年頃は、復帰になるいもうわさがでてきたんで、返還される奄美群島は。それでそういううわさだつたもんだから、復帰になれば、みんながもう阪神方面に出ていくにちがいないといふことを見越して、昭和二七年に出てきたんです。それが出てきたところが、また、ここが仕事なかつたんですね。むかしの友人を片つ端から探して、あつちこつち行つてもとの交通局に入れてくれつてなにしたんですけどね。終戦後、すぐ自分は見にきたんですけどね。大阪に。大牟田におつた時代に。そして一応顔だしたものだから、顔をだしたために自然退職になつてしまつたわけです。：：それから大阪あたり、どこ行つたつて昭和二八年なんであるところないです。それでようよう大阪の日綿がね、：：あそこに友だちがいて、あそこには紹介してもらつて、あそこの守衛で入つたんです。そして、まあ、守衛で入つて給料も安かつたんですけどね。また家の世話になつて、洋裁してくれたもんだから、そしてあるあいだにボツボツ待遇

もようなりましてね、そして定年までおつたんです。」

このように、再度仕事を求める時期を経て、都市での生活の基盤を得、現在の状況に至るプロセスがFさんの「都市化」の第二の段階である。その間に都市的な生活様式を身につけるだけでなく、意識や価値観もゆっくりと変容していく。そしてその変容は、たとえば帰村の意志がなくなつたり、墓を「都會」で購入したり、という具体的な意識や行動のなかにあらわれてくる。

「墓は、昭和三〇年につくつてる。というのはね、お墓がいなかにあればね、なんじやかんじや、しきたりが多いからね。お墓だけはこつちで早よ買おうかということで、ちょうど売り出しがあつたから、そのときにはまずお墓だけは買つかうて、買うたんです。」

Fさんは、かなり早い時期に墓を購入しており、もはやへいなかへは帰らないという意志をもつて「都市化」のプロセスを歩んできたことになる。

#### (4) Yさんの「都市化」のプロセス

Yさんが「都會・大阪へ来ることになつたきっかけは、結婚であつた。

「(昭和)二二二年にいつべんこつち(大阪)来て、いなかへ呼ぶつもりで。やつぱり都會の人。やつぱり都會の人をもらつた私の先輩がおりまして、阿鉄に、その当時の区長さん、○さんがおられて、私がそいう話したら、お嫁さんがかわいそだから大阪に行きなさいよ、ということで、だつたらそうしようかと思ひ立つて、何の心の準備

なしに、ちょうど一年後には、こつち私來ました。昭和三三年一〇月二六日に結婚、こつちに昭和三四四年一月一日に来ました。」

Yさんの「都市化」のプロセスも、Fさんと同様に仕事を探すことから始まる。いなかにおいて青年時代から商業にかかわりをもち始めていたYさんは、「都會」でも同様の職業についていくことになる。「都會」で最初に仕事を探した頃のことと鮮明な記憶でつきのよう語っている。

「私、奄美が好きなんんで、仕事も何もなしに来るもんだから、いなかのバナナ商売なんぞやつていた友だちが、あんたが大阪行くんだつたら、奄美の特産物を大阪にはかすパイプ役になつてくれんかとそんなことで。お金はないけど。なら、いくらでもあんたが売る約束してくれたら、あんた信頼していくらでも送るから、というから、いなかから来てすぐ、ダブダブのズボン着たまま、中央市場行つて、友だちの車で送つてもらつて、あつちの貿易部長と会つて、奄美のバナナを売つてみたらともちかけたら、そしたら一〇〇かごぐらいいつぺん送つてごらんという約束をとつたが、奄美の業者にいうたら、一ヶ月待つても二ヶ月待つても来ないのよ。やつぱ一〇〇かごとなつたらむこうもびっくりしたんでしようね。それで待つていてもどうしよもないし、お金はなくなつてくるし。だから、もう家内はおるし。これじやあかんと思うて、私、商売好きだから、何か商売に関係ある仕事を思つて、二代めの(阿鉄会)会長さんとこに遊びに行つた。吹田のほうに。そこの通りのほうにヤクルトの営業所がある。いうてみようかということになつて、いうたら是非

きてくれ。：三日後に面接に行つた。

最初の仕事は乳飲料の配達であつた。へいなかへになかつたので、

配達のとき自転車に乗れなくて困つたという。そして三ヵ月して給与が歩合制になり、生活は苦しかつたが、配達数を増やすことにつとめ、三年たつて販売所をもつことになる。

「増やすことを一生懸命やれば、それで収入あがつていくんやからね。そういうことで順調に行つたもんで、三年めに販売所、こここの近く、バス通りに借りて販売所、お金がないのに、：家を借りて借金して、冷蔵庫なんか買つてやるんだから、借金百五十万して。」

販路の拡大につとめ、乳飲料販売の仕事も軌道にのつていたが、一〇年後に販売所をやめることにする。一九七三年、初めてへいなかへ一週間帰省し、それをきっかけに大島紬の販売に転向する。ところが一九七五年頃、借地だつた店の土地を立退かなければならぬことになる。翌七六年に、酒屋の倉庫だつた近くの中古のビルを約三、五〇〇万円で購入し、大阪市大淀区の現在の住居兼事務所をもつた。

「地元の銀行あるでしょ。一千万だしてくれて、それから私がまた

一千万、四苦八苦しながらつくつて、それでまだ足らんの、あと八百万ほど借りて、二千八百万借りた。ほんとうに苦しかつたね。月々五、六十万払つていかなきやならん。：その間で、商売しながら払つていかなきやならん、だから、必死ですよ。ようやく来年の二月で一〇年になる、五一年に買つた。ずっと大島紬やつていたけど、それだけじやということで、温水器とか洗浄器、C製作所の特約

店、それもこのビルがあるおかげでむこうも安心してやつてくれ、保証金もなしに。」

ビル購入の借金返済に苦しい一〇年間の終わりが近づいてきていた一九八四年一月に、火事が起こり、母が焼死するという出来事があつた。そしてそのとき「都會」の郊外の靈園に墓地を買つたといふ。

Yさんは「いなかの人たちはほんとうにありがたい」という。「過去の都會」から「現在の都會」にいたる過程で遭遇するたとえば求職や転職、「借金」、母の死などのような出来事の際に、「ほんとうに力になつてくれる」からである。とくにHさん、Oさんという名前があがつたが、「都會」において同郷であることを機縁とする数人の人との親密な人間関係が、長い「都市化」のプロセスのなかで持続されている。彼らは、Yさんの人生においてD・W・プライスのいうような「道づれ(convoy)」として位置づけられるだろう。そして「道づれ」とともどもにYさんの長い「都市化」のプロセスが進展してきた。

以上のようなFさんとYさんの「都市化」のプロセスの考察をふまえて、つぎの二つのことを指摘できる。

第一に、「都市化」のスタートの明確さである。大正時代初めから大阪への出稼ぎが始まつていたので、三〇代から七〇代のどの人も、すでに母村・阿鉄において「プレ・都市化」といえるものが始まつていた。たとえば「大阪はええぞう、おまえもいつべん行つたらえ

えつて聞かされていた。大阪の話はよう聞くんですね」という。しかし「都市化」の出発点である「過去の都會」へ来た最初のときは、あまりにも異質な空間を移動したこともあって、FさんにもYさんにも鮮明な記憶として保持されており、豊かなディスクールで表現されている。

第二に、「都市化」のプロセスは、二つの段階にわけてとらえられる。「都市化」の第一の段階とは、II「過去の都會」において「都會」の言葉や生活様式を身につけ、都市で生きていくための仕事を求める時期である。その期間は一年から二年くらいのようだ。そして「都市化」の第二の段階は、IIからIV「現在の都會」へ漸次的に進み、都市的な意識や価値観を内在化し、現在の状況にいたる長いプロセスである。そのプロセスを経て、結局「都會」で墓を購入したり、「今はいなかの言葉のほうがかえつてでにくい」と述べられるような状態に達している。

第三に、「都市化」は「道づれ」とともにすすんでいくことである。彼らにとって「都市化」とは、個人に独自で個別なものというよりも、他の阿鉄出身者の「道づれ」の「都市化」と同時進行しつつ、相互にかかわりながらつくられていくものである。

#### 四、「いなか」観と「都會」観

前節のような「都市化」のプロセスを経て、いく人たちがどのような意識をもっているのか。その意識を、VI「現在の都會」にいる人

からみた「いなか」観あるいは「都會」観によつて示そと考へる。本節では、一九四七年四八年生まれという三〇才代の関西阿鉄会にかかる三人の男性へのインタビューで得たディスクールから検討したい。三〇代の人のディスクールをとりあげるのは、I「過去のいなか」やIV「現在の都會」にたいする言及が豊富であつたことがおもな理由である。五〇代、七〇代の人たちにそれらについての記憶が欠落していたり言及がなかつたわけではない。一対一の対話形式ではなく、同時期の過去を共有する三人へのインタビュー形式をとつた結果、M・アルヴァアクスが指摘するように、「情緒的コミュニティ(une communauté affective)」のなかで個人の記憶が活性化され、想起が促された<sup>(2)</sup>といえよう。

ここではとくに「いなか」観に注目したい。なぜならば、「都會」において同郷団体にかかわつていて、いなかとの関係が切れていないことや、「都會」についての意見はたえず「いなか」との対比にもとづいたものであることが想像できるからである。また、ベクトルが「都會」にむかう「都市化」のプロセスが進展していくとき、対極にある「いなか」がどのような位置づけになつていくのかを探ろうと思うからである。

Tさんは一九六二年に、Iさんは一九六三年に、Kさんは一九六七年に大阪へ来た。一五才から一八才のときに「都會」に移り、約二〇年経過した現在、三〇代後半となつた彼らはライフ・サイクル上では職業選択、結婚や子どもの出生を経て、家族を形成し、ある程度の安定に達した成人人期に入つている。

### (1) 「過去のいなか」

一九五〇年代前半、阿鉄は世帯数一二〇戸、人口約六〇〇人の集落であり、一九八五年には三九戸八八人となつた現況と比較すると、当時は居住人口のはるかに多いにぎやかな時期であった。一九五〇年代後半になって、阿鉄をはなれる人がどんどんふえていったようであるが、三〇代の彼らはもつとも活気のある阿鉄で幼少を過ごしており、互いの話に連鎖して豊かな思い出がつぎつぎに語りだされていく。

山でメジロ捕りをしたり、海にもぐって貝をとったり、魚つりをしたり、「今、考えてみて、自分で遊びをつくったんですよ」「一番悪いことしましたね」と述懐されるような無邪気な遊びが思いだされる。おとなたちがさとうきびを収穫し、黒糖づくりをするのを手伝つたこと、児童会でハブよけの「用心棒」とよばれる棒をつくり村のなかにたてたこと、台風のとき阿鉄の湾に避難してきた船に乗せてもらつたこと、校区の運動会では他の部落に対抗意識をもつていたことなど、話題が流れるように続く。

### (2) 「現在のいなか」

なつかしさをもつて語られる「過去のいなか」はすべてが肯定されるデイスクールであるのにたいし、「現在のいなか」はちがつている。

まず、彼らは、「都會」に移つて以来「いなか」へは二、三度しか帰つてないが、その折に目にした「いなか」の変貌ぶりは大きな驚

きとなつてゐる。

Tさんは「都會にこう長くおるでしょ、パツと帰るでしょ、(村が)ものすごく小さく感じる。三分の一くらいの小ささ。道幅とか村全体が。もうすべて。だれでもいいます」と語る。

Kさんも「大阪来てから一〇年ぶりに帰つた、五二年に。頭にあるときのイメージとちがつていました。いなかつて当時はものすごく大きくおもつていた。パツと古仁屋からこう来て、道からこうみえる。パツとみたら、ほんとうに小さく感じました。阿鉄の湾つて、むかしはとても大きく感じて、はしからはしまで泳いだ。ところが一〇年ぶりに帰つて湾をみたら、ほんとに狭いなあと思いました。一〇年ぶりにみると小さくみえる」と述べている。

さらに「畠が荒れ放題になつた」「区画整理、全然されてない」「ほんとうにさびれたなあつていうのが第一印象」「全然活気がないね」というような衰退を表現する言葉が多くだされる。Kさんによれば「全体にさびしく感じましたね。それと、われわれがおつた頃は道路歩いてたら、必ず村の人と出会つていた。一〇年ぶりに帰つたとき、いない。出会わないですよ。歩いてないつてことは人が少ない。人口が減つてることですよね。」

幼少時に体験したものが、本人の成長と時間的隔たりを経て、成人後に狭小に感じることは、儘あることであろう。だが、衰退の印象は人口減少による現実の出来事の反映である。そしてその印象が「都會」との対比でより一層強くなることが指摘されている。

「そりやあ、都會出て、人口みて意識してるから、そうなるのかも

しれないんですけどね。住んでるほうは、それであたりまえに思つて  
るかもしねない」(Kさん)

だが、「現在のいなか」が、さびしく、活気のない、衰退した状態  
に変貌していくても、三〇代の人たちはみないずれ「いなか」に帰り  
たいなあという気持ちを抱いていることを表明する。

「老後はぜひいなかでやりたい。」(理由は?) 理由というよりも、  
まず風景がきれいつてこと。今、うちのおばあちゃんを見てるとね、  
外へ出られない。外へ出ちやうと車が通つてゐる。危ない。で、いな  
かでしたら、自由ですからね、散歩が。そういう危険性が少ないつ  
てことで。で、われわれが老人になるとそういう気持ちになるでし  
ょうね。自由に散歩できるあれで、やっぱりいなかで生活したいな  
あ思うでしょうね」(Kさん)

Tさんは「やっぱそいつと老後はそれがいいなと思うな。年い  
つて働けなくなつたら、いなかで死んだほうが」という。そして「こ  
れつていう仕事さえあつたら、いなか」に帰りたいと思つております。  
「そのほうが長い目でみたらよろしい、いなかが。都會でたいした出  
世もできないし」とその理由を述べている。

Iさんはかつて本氣で「いなか」に帰ることを考えたことがある  
といふ。「ぼくもいちどき帰ろうと思つたね。それはね、友だちがね、  
同級生が真珠の仕事やつていてた。ま、今でもやつてるけどね。そう  
いう話でたまたま帰つたときに、もう五、六年になるかな、」など  
つもりで話を聞いとつたんです。一応話だけしてみて、一応帰る

がいいかな、いうて。考えてみて、もし帰つて何年も遊ぶようなこ  
とになれば、なんにもなれへんし、まだこつちであれしようかない  
うことで」帰ることに心は動いたが、「急に収入がぱつと減りますで  
しょ、そうすると生活がねえ…」というよつた心配が起つて、結局  
決断はできなかつたという。

実際、「いなか」に帰ることを具体的に考えると、さまざま不安  
もでてくるようだ。生計をたてるだけの仕事があるのか、「なにか産  
業をおこしてね、定住できるような方法を探そうじやないかつてい  
うたけども、一時的にはいいだろうと。でも、二年三年ずつと住  
んでみると、退屈するんじやないかとみないうてたけどね」とKさ  
んが語るよううに、退屈するんじやないか、Tさんがいうように「都  
会」に遅れるんじやないかというよつた懸念や不安が生じてくる。  
それでも「都會」の経験をふまえて比較した「いなか」の生活のよ  
さも主張され、そこに彼らのアンビヴァレントな気持ちをとらえる  
ことができる。「一〇人のうち八人ぐらいは、みんなが帰つたら帰ろ  
うっていう気持ちがある。自分だけ帰るつていうのはさびしいから  
な、だから」(Tさん)

「やっぱり何十年間か都會で生活してみて、あらためていなかのよ  
さがわかりつつありますからね。むこうでは、あたりまえで感じな  
かつたことが、やっぱりこうやつて都會へ出てみて、生活してみて、  
いなかの生活のよさがしみじみわかりますね」(Kさん)

### (3) 「都會」と「いなか」のあいだ

「都會」での生活年数が長くなるにつれ、価値観や態度も「都市化」され、「都會」での生活も安定度を増す。この段階に至ると、「都會」には「いなか」にない多くのものがあることがわかるだけでなく、

からなつてゐるといえる。

そのことにたいする評価がでてくる。それは肯定的なものだけではなく、三〇代の人たちがあげた近所づきあいの稀薄さ、親しみのない人間関係、自然の少ない環境などのような否定的な評価もある。

同時に「いなか」にも「都會」になかったものがあることがわかってくる。とくに「過去のいなか」はいつでも肯定的なものである。「現在のいなか」もよい状態ではないが、けつして否定されるものではない。だが、「いなか」は、帰りたいが帰るところではないようだ。そのことは、三〇代の人たちよりも五〇代七〇代の人のディスクールではつきり表現されている。そして「過去のいなか」は「都市化」が進み、「都會」での経験がふえるにつれ、経験の量のうえでも時間的経過のうえでも相対化されたものとなつている。だが、不可逆的な唯一無二な経験でもあり、しだいに表象のなかの存在、イメージとしての「ふるさと」として再組織化されている。

結局、「都市化」されてきた個人の意識の特徴として指摘できるのが、このよくなどちらを肯定も否定もできない「都會」と「いなか」へのアンビヴァレントな意識である。このアンビヴァレンスは、よい「過去のいなか」／わるい「現在の都會」と、わるい「現在のいなか」／よい「現在の都會」という二つの対照的な価値評価で成立しているが、基本的には「都會」へのアンビヴァレントな評価と、「現在」の時点における過去への「賞賛的なスタンス(appreciative stance)」<sup>(2)</sup>

## 五、ノスタルジーと「集合的記憶」

「都會」に来て一〇年三〇年たつた阿鉄出身の人たちのライフ・ヒストリーを分析することによつて、「都市化」の諸相をみてきた。第一に、「都會」に移り住み、職業を求めながら、言葉や都市的な生活様式を身につけていく段階があり、ついで徐々に都市的な意識や価値観を内在化していく長いプロセスがある。このプロセスは、ベクトルの先がたえず「都會」にむかはながら現在にいたつてゐるものであるが、彼らのもつアンビヴァレントな意識をみると、同時に「いなか」にむかうベクトルをあわせもつてゐることがわかる。あるいは対極にむかう両方向へのベクトルをもつがゆえに、そのようなアンビヴァレンスが生じてゐるともいえよう。

このアンビヴァレンスをもつ彼らがかわる同郷団体は、両方向のベクトルに対応した機能をもつてゐる。すなはち「都市化」のエージェントとしての同郷団体という側面と、「いなか」を媒介する同郷団体という側面をあわせもつてゐる。かつて同郷団体は、「都會」へ来るときの「つて」となつたり、知りあいのいない「都會」での「精神的な励み」であつたり、都市的な行動様式を教示し「都會」の生活に欠かせない情報を伝えてくれる「都市化」のエージェントとして重要な役割をはたしてゐた。しかし「都市化」のプロセスが進展した今、この側面の機能は彼らにとつてそれほど重要な意味を

もたなくなつてゐることは事実である。そしてむしろ「いなか」と「都會」のあいだに介在し、「いなか」へのノスタルジーをみたす側面での働きが強くなつてゐる。そこで彼らの抱くノスタルジーに焦点をあて、「都市化」それでもなお同郷団体にかかわる彼らの心性を考えてみよう。

F・デーヴィスは、ノスタルジーを論じるにあたつて、ノスタルジーの対象が現在の情況と比較され肯定的な感情をふきこまれた過去であることをふまえたうえで、ノスタルジーは「我々のアイデンティティを構成し、維持し、再構成する果てしない作業で我々がもつてゐる手段の一つ」であるととらえて、ノスタルジーをアイデンティティの連續性と非連續性という視点から説明することを試みてゐる<sup>(12)</sup>。本稿の三節で示したような、I象限とII象限の明確な非連續性、「都市化」という長い変化のプロセス、そして四節で述べた「よい過去／わるい現在」という「内的な対話」の存在、現在の時点での過去への「賞賛的スタンス」、これらの点はデーヴィスがノスタルジー現象を説明するポイントにそのままあてはまるものである。デーヴィスの表現をかりれば、彼らのノスタルジーの特徴は「アイデンティティの連續性」<sup>(13)</sup>と「特別な」過去<sup>(14)</sup>という二つの点でとくによく理解されうる。

かつてII「過去の都會」において、たとえばTさんが「同級生にね、手紙だしました、もう都會はいい、いなかに帰りたい」と語つたことから推察できるように、彼らは強い「アイデンティティ・クライシス」を受けたが、「都市化」の第二の段階がかなり進んだ現在ではこの種のクライシスを感じることはもはやほとんどないだろう。しかし彼らのアイデンティティはI象限からII象限への移行で生じた非連續性を内包しており、「連續性への憧憬」<sup>(15)</sup>がノスタルジックな感情の背景にある。そこでノスタルジーは、「過去のいなか」で形成されたアイデンティティを今再確認することによってその連續性を促進し、現在の自己を保証することに役立つてゐるといえる。さらにノスタルジーは、たえず現在の情況と対照された過去という「特別な」過去を問題としている。彼らにとつての「特別な」過去とは、否定的なものが排除されて再構成された「過去のいなか」が、現在の情況とりわけ「現在の都會」の否定的な部分と対置され、とらえられたものである。この肯定される「よい過去」対「よろこばしくない現在」というノスタルジックな「内的対話」のなかで、むしろ「現在の自己の暗黙の有利さを推論しよう」<sup>(16)</sup>と試みているのである。いずれにしてもノスタルジーは、「都市化」という長い変化のプロセスのなかで現在の自己を保証することに役割をはたしていることになる。

彼らのノスタルジーは、「失われた小さなパラダイス」<sup>(17)</sup>である「過去のいなか」にたいして抱かれるものであるだけではなく、そのノスタルジーは他者と共有できるものであり、集合的ノスタルジーのなかへ溶融できるものであることも大きな特徴である。ノスタルジーを抱くということは、デーヴィスの比喩<sup>(18)</sup>をあてはめれば「望遠レンズ」で拡大し装飾された「過去のいなか」が、まるでゲシュタルト・シルエットの反転のように図としてあらわれ、一時的に「現

在の都会)が地のなかに消えていった状態である。彼らは日常生活のなかでいつもノスタルジックな感情に浸っているわけではない。少なくとも「年にいつべん」既述<sup>(19)</sup>のような都市における「ふるさと」の一日において、「過去のいなか」の再現のなかで個人のノスタルジーをみたすことができる。この「過去のいなか」の再現とは、意図的に「シエルエット」の反転が仕掛けられた場であり、同郷団体が提供する集合的ノスタルジーの表現の場であるといえるだろう。ここで「過去のいなか」への個人的ノスタルジーは、集合的ノスタルジーのなかに溶融されたものとなっている。

もともと同郷団体とは「過去のいなか」に準拠した思い出を集合

的にプレーするところとしてつくられたものといいうる。Fさんは三〇年前に関西阿鉄会をつくった経緯をつぎのように語っている。

「阿鉄から、あんな遠いところから出てきてですね、…なるべくいなかの苦労を忘れないようにして、年にいつべんでも思い出を語りあっていこうかいうて、話しあうて、ちょうど共鳴してくれる人がおつたもんだから、みな、そつしましようということで、二八年頃からかかって約二ヵ年くらいでようようまとまつたんです。…ふだんはよれないけど、せめていつべんだけでも寄ろうか。そうすればいなかの苦労を忘れずに語りあうことができるんじやないか。」

したがつて同郷団体は、同地域出身者たちの「集合的記憶」の装置とみなすことができるだろう。この「集合的記憶」とは、アルヴァクスによれば「その集団の個々人に共有された思い出の塊であり、これらの思い出は互いを抛りどころとしている」ものであり、個人

が思い出を想起し、確認し、確かにし、欠落を埋めるための手がかりとするものであるという<sup>(20)</sup>。だから日常生活のなかでは想起されない「過去のいなか」の思い出も、「望むときに自由に入りこめる集団のなかで、いつも親密な関係にある集合的思考において、保たれているから」<sup>(21)</sup>、つまり同郷団体が保持してくれている「集合的記憶」を媒介にしてよびおこすことができ、あいまいな思い出も活性化され確かなものとなる。あるいは彼らは「現在の都会」において個人の「過去のいなか」の思い出をこの「集合的記憶」の装置に預けておき、ときに同郷団体にかかわって、思い出を喚起しノスタルジーにひたることができる。

しかし他方で、「集合的記憶」とは「個人の記憶を包みこむが、個人の記憶とませあわざれない」ものであり、「その集合的記憶のもつ法則にのつとつて進化していく」ものである<sup>(22)</sup>。このアルヴァクスの指摘する「集合的記憶」の外在性は、あとから集団に参入するものにとつては、一つの障壁となつている。三〇代のKさんは来阪当初、すぐに阿鉄会にかかわらなかつたときのことをつぎのように語っている。

「ほくなんかも最初の頃はこういう会があるいうので行つたことがありますよ。そしたらほとんど顔がわからんないんですよ、先輩たちのね。だからあまり楽しみっていうのはなかつたですね。」

しかしその後Kさんは積極的に阿鉄会にかかわるようになり、現在では「青年部長」をつとめている。「集合的記憶」を共有できるようになつたとき、この集団の一部となつたといいうる。そして「集

命的記憶」の継承と保持に加担するようになる。

「ほくが一番そうじた会に率先して参加しようと思うのは、いやわれわれが四〇、五〇になつたときにそつとう余はまだ残つているわけですよね。せつかく先輩がつくりあげたものを引継いでいる」ということで途切れたらたいへんだから、なんとかなんらかのかたち残していくなくちやいけないと、われわれの年代が率先してやらないと」

いのよつはKさんは語つているが、同郷団体のもつ「集合的記憶」には〔過去のいなか〕のことだけでなく〔過去の都会〕のことも含まれており、この「集合的記憶」を内在化し共有に加わつていく」自体、あとから参入した彼らにとっての〈都市化〉のプロセスの重要な一面であるといえるだろう<sup>(23)</sup>。以上のような考察を通して、〈都會〉と〈いなか〉のあいだで、〈都市化〉された人たちが、自己の〈現在〉を保証しつつ、〈過去〉と〈いなか〉へのノスタルジーを同郷団体という「集合的記憶」の装置でコントロールしながら生きていくのがおがつかひあがつてくるのである。

### 注

(一) 関西阿鉄会は、阪神都市圏に居住する鹿児島県大島郡瀬戸内町阿鉄出身者のつくる同郷団体である[図2参照]。阿鉄から大阪への移動は、一九一七年頃から始まり、当時おもに大阪湾岸の重化学工業地帯で働くこと

た阿鉄出身者たちは、大阪市港区の安治川沿いに多く住んでいて「一心会」と称した会をつくっていたが、戦争によってたくさく消滅したという。戦後一九五五年に「阿鉄親生会」という名称で新たに会がつくられ、その後一九六八年に関西阿鉄会という現在の名称になる。一九八五年十月現在、

所帯数二二〇、総数二三二一人、居住地は関西一円に広がっているが、大阪市東淀川区、淀川区、吹田市、豊中市という大阪市北部から北摂にかけての地域で五八所帯、全体の26・4%を占めていることが特徴である(「阿鉄会創立三十周年記念誌」より)。阪神都市圏における居住分布の状況については図3参照。会員の職業に偏りはないといふ。会費は年三千円で、新年会と十月の総会をおもな年間の行事としている。なお、関西以外の阿鉄出身者の同郷団体は関東阿鉄会(四一所帯)、名瀬市在住阿鉄会(一三所帯)、古仁屋在住阿鉄会(二四所帯)と他に二つあるが、関西阿鉄会がもうとも長い歴史をもち、規模も大きい。

(2) 拙稿「都市のなかの『心のやか』」京阪神芝会の「日一」「年報人間科学」第七号、一九八六年、一七—二五頁。

(3) 『瀬戸内町勢要覧 昭和五九年版』瀬戸内町役場、昭和六〇年。

(4) 心性(mentalité)」については、宮島篤「フランス社会学派と集合意識論—歴史における『心性』の問題にふれて」『思想』六六三号、一九七九年参考。

(5) 本稿で用いるライフ・ヒストリーのインタビューは、七〇代のEさんには一九八五年六月一六日大阪市北区で、五〇代のYさんは一九八五年六月三日大阪市大淀区で、三〇代のKさんTさんIさんは一九八五年六月三〇日大阪市淀川区で、筆者がおこなつたものである。また、関西阿鉄会の会合は、一九八五年一月四日大阪市大淀区での「新年会」、一〇月二三日尼崎市での「総会」、六月一六日大阪市東淀川区と七月二一日豊中市の会長Sさん宅での「役員会」に参加し取材した。会長のEさん、前会長のEさんはじめ関西阿鉄会の多くの方々の御協力を得ました。記して心から謝意を表します。なお本稿は、一九八四年度トヨタ財團個人奨励研究助成の成果の一端である。

(6) Bertaux, Daniel, "L'approche biographique. Sa validité, méthodologique, ses potentialités," *Cahiers internationaux de Sociologie*, vol. 69, 1980, pp. 197-225.

Bertaux, D., "The Life Story Approach: A continental view," *A.J.S.*, vol. 10, 1984, pp. 215-237.

(7) C・W・ルズ「社会学的想像力」鈴木広記、紀伊国屋書店、一九六五年。

(8) ルズ 前掲書、一八八頁。

Bertaux, D., op. cit., 1980, pp212-217.

(9) D・W・プラーベ「日本人の生れ方—現代における成熟のメカニー—」

(Plath, D. W., "Long Engagements—Maturity in Modern Japan—,"

1980) 井上俊・杉野日康子訳、岩波書店、一九八五年、一四頁、一一九—

一一一一一頁。

プラーベによれば、「道連れ」(convoy)は「ある人の人生のある段階を通じてずっとその人とともに旅をしてくる親密な人ひとの独特の集団を指す。」そして「私たちが道連れたちの人生に影響を与えるように、道連れたちもまた、やまねまでの形で私たちの人生に重大な影響を与える。私たちはいわば道連れたちによってつくられていくのである」という。本稿でとりあげたような人生の途中で都市社会に参入した彼らの場合、ライフ・コースの方向指示をしてくれる「文化的道筋」(pathways)として、伝統的な奄美社会で共有されてきたものを指針とする」とがやきなかつた。したがつてとくに阿鉄出身の「道連れ」たちとの緊密な結合のなかで相互に「道筋」を確認しあいながら長い「都市化」のプロセスを歩むことが必要であつた。

(10) Halbwachs, Maurice, "La Mémoire Collective," "Presses Universitaires de France, 1950, pp. 11-15.

(11) Davis, Fred., "Yearning For Yesterday—A Sociology of Nostalgia —", The Free Press, 1979, pp35-37.

(12) ibid., pp35-37. なおF・フレーディスのノスタルジー論については、細辻惠子「ヘベタルナーの諸相」作田啓一・富永茂樹『自尊と懷疑—文芸社会論やそれゝ』筑摩書房、一九八四年、一〇一一二八頁、参照。

(13) Davis, F., op. cit., pp31-50.

(14) ibid., pp3-16.

(15) ibid., pp49-50.

(16) ibid., p46.

(17) ibid., p46.

(19) 前掲拙稿「都市のなかの『やがて』—阪神大震災—」一九八六年。

(20) Halbwachs, M., op. cit. 1950, P33.

(21) ibid., pp35-36.

(22) ibid., pp31-32.

アルカトクの記憶の論議のなかにノスタルジーの概念をもみえたものとして次のものがある。Vromen, S., "Maurice Halbwachs and the Concept of Nostalgia," *Knowledge and Studies in the Sociology of Culture Past and Present*, vol. 6, 1986, pp55-66.

(23) 二〇代のKちゃんTちゃんYちゃんHちゃんが、居住地がそれぞれ奈良市、東大阪市、豊中市などバラバラであるにもかかわらず、一ヶ月に数回は会っているという。同郷団体の「集合的記憶」はどの人もすべて共有できるわけではない。たとえば世代が異なれば〔過去のいなか〕の思い出も少しそつちがつたものとなつていて、だから規模の大さくなつた同郷団体よりも同級生や幼なじみのような「道連れ」たちでつくる「情緒的コミュニティ」のほうが、彼らの「集合的記憶」を保持するにはより適切な装置となつており、そのなかでのほうがよりノスタルジックな情緒を表出しやすいことを指摘できる。

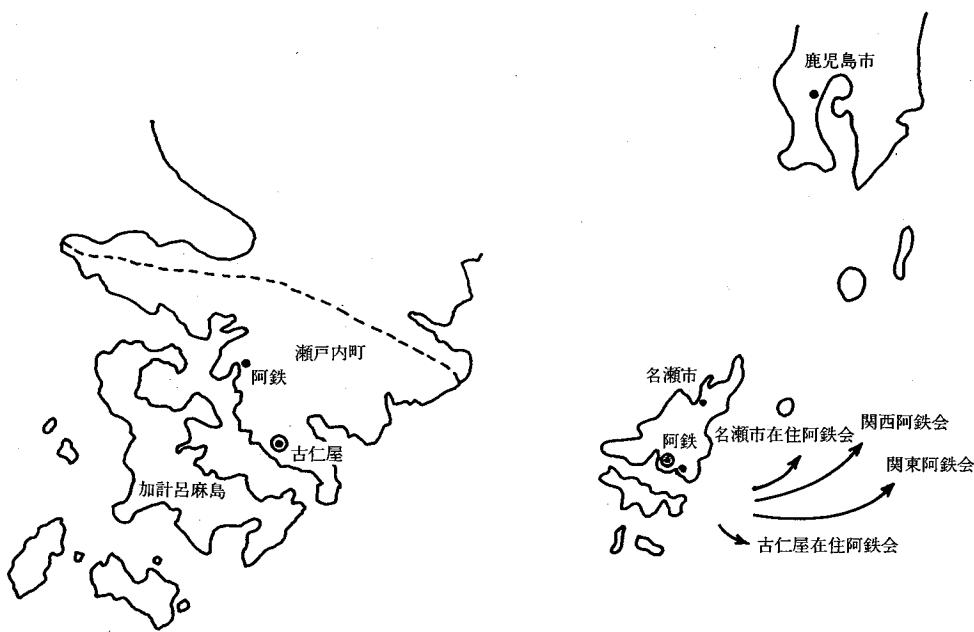


図2.瀬戸内町阿鉄と阿鉄を出た人たちの行き先

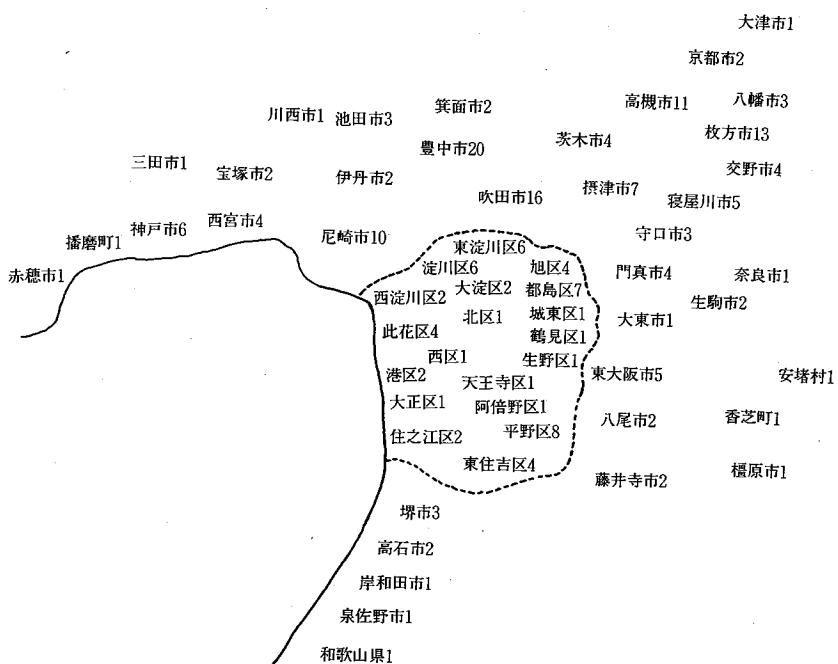


図3. 関西阿鉄会220世帯の居住地域(『阿鉄会創立30周年記念誌』、1985年10月より作成)